Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-24

美の固有性とその多元的拡がり : カント美学のリハビリタツィオーン

伊藤, 政志

(Citation)
美学芸術学論集,5:58-59

(Issue Date)
2009-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81002344

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002344

博士論文要旨

美の固有性とその多元的拡がり
—カント美学のリハビリタツィオーン—

伊藤政志

本博士論文は7つの章から構成され、その考察は、カント美学を中心点として、同時代のドイツ、イギリスにおいて展開された美学理論を射程範囲とし、カントの『判断力批判』および同時代の美学理論の内在的テキスト解釈を中心に進められる。これが目指すのは、カント美学のなかで集約的に示される18世紀美学のエッセンスと、そこから醸成されたカント美学のエッセンスを、相互照射のなかで浮き彫りにし、カント美学において示された、美および美的経験の固有性とその多元的な拡がりを考究することにある。各章の概要は次の通りである。

序章では、現在に至るカント美学研究の流れを概観し、本論の問題意識と方向性を明確にした。ここ100年の間で、カント美学研究は、ヨーロッパ内部の歴史研究から離れ、様々な哲学的潮流と連動しながら、世界的規模で行われるようになったが、他方で、イェンス・クーレンカンプフによるカント美学失効宣言に示されるような、カント美学と現代的状況との乖離も明白となった。こうした分裂した状況を鑑み、本論は、カント美学をもう一度全面的に再解釈することを目指すのであるが、その際、本論の特徴となるのは「二重性」という観点から再検討が行われる点である。カントの美学は、テキスト内部においてもまたその解釈においても、単一的な構造として捉えられるべきではなく、むしろ、内に齟齬や対立、葛藤を含みつつ動的な一を形成する体系的思想として捉えられなければならない。そのようなカントの思想を内側から外側に向けて開示していくことこそ本稿の最大の目的である。

第二章では、カントにも大きな影響を与えた、イギリスの趣味理論を代表して、ハチスンとヒュームの趣味理論のうちで美的感情がいかように特徴付けられているかを考察した。その結果として、美的感情とは、パトスに代わる近代概念として発明されたものであり、それは半ば自然的、半ば社会的・人為的なアマルガムであることが判明した。カントとほぼ同時期のイギリス趣味理論においても、趣味は自然化と社会化の間をうごめいている。本論は、カントの趣味理論にも引き継がれることになる、この二重性を、論理的な欠陥とみなすのではなく、近代美学の出発点として引き受けることを提案する。

第三章からは、カントの趣味理論の内部にある二重性を念頭において、カントのテキストと取り組むことになる。この章では、美についての判断が有する普遍的妥当性の根拠付けを巡る議論に焦点をあてた。クーレンカンプフはカントの議論のなかに、個別的な対象レベルと超越論的レベルとの間の「次元の混乱」があるとして、それを厳しく批判する。このカント美学のアポリアと、ポール・ガイヤー、クリステル・フリッケなどのカント美学研究者たちが、どのように取り組み、それを乗り越えようとしたのか。本章は、これを概観し、問題点を指摘したうえで、カント美学のアポリアは、バウムガルテンによる美学の創立当初から、近代美学を根本から支える可能性として含みこまれていることを示した。

第四章では、カント美学の中心概念の一つである、合目的性の問題を取り扱った。ここでは、バウムガルテンやマイアーに代表されるライプニッツ・ヴォルフ学派の合理主義美学とカントの美学を比較検討し、カントが合目的性概念によって快を基礎付けた意義を考察した。カントが合理主義美学から決別するまでには、それとの長年にわたる取り組みがある。この換骨奪胎の過程を追跡するなかでは、本論が「目的論的転回」と呼ぶ、カントの思索の変化が浮き彫りとなる。この転回によって、カント美学は、その原光景とも言える、生きた有機的自然のなかで、美的快を生命感情のダイナミックな奔出として捉えることに成功したのである。

第五章では、特に、趣味判断における構想力の活動に焦点を絞って、趣味判断の公共的な性格（共通感覚としての趣味）を考察した。まず、カントによって、構想力がいかなる能力として規定されているかを概観したうえで、趣味判断における構想力の有り様としてカントが述べている「概念を伴わない図式化」がいかなるものかを考察した。その結果、この図式化は、主観の現実性からの脱自と可能的な他者への共感を可能にしているものであることが判明し、共通感覚は、構想力による「感性的虚構の倫理」として提示できるという結論に至った。

第六章では、趣味判断の弁証論とそれに続く象徴論へと考察の場を移し、美について語り、判断するという行為にかけられた意義を考察した。ここでは、美の経験を言語化する可能性を念頭において、まず、弁証論を考察し、アンチノミーの解消が示唆する第三の視点が、象徴論において、言語化不可能なものを、象徴として直観化し、言語化可能にしていることを示した。クーレンカンプフが指摘した「次元の混乱」は、カントの趣味判断理論の破綻をもたらすものではなく、弁証論を経て象徴論へと至るなかで、象徴という積極的な考察方法を獲得していることが判明するのである。

最終章は、本論の結びとして、本論全体を貫徹する「二重性」という視点を、様相の観点から簡単に総括した。そうすることで、明確にしたのは、本論で為しえたことと、今後の課題である。

本論全体が明確に示したのは、カント美学あるいは18世紀美学が内包している論理的・構造的なちぐはぐさのなかにこそ、近代美学の最大の可能性が秘められているということである。各章において主題化したように、18世紀美学およびカント美学のうちに含まれる自然的 - 理念的、私的 - 公共的、個別的 - 普遍妥当的、現実的 - 想像的、言語的 - 感覚的という対立項は、選言として解釈されるのではなく、その両項の二重性において解釈されなければならない。美の固有性と多元的拡がりはそうした二重性から結晶してくるのである。だが、これをさらに根拠付けるためには、今一度、この二重性を様相の二重性として捉える必要がある。カントが趣味判断に認めた「範例的な必然性」は、可能性を排除するのではなく、可能性の総体に依拠する必然性を示唆している。この点を入り口にして、カントの超越論的哲学における可能性の問題、さらにそれが持つ美学的な意義について考察を進める必要がある。

（いとうまさし：近畿大学医学部非常勤講師）